

ミフラーブ紀行



1. チュニジアのカイラワーンの大モスク、広い中庭とミナレット。手前が礼拝室



3. 同、ミフラーブを飾るラスター・タイル



2. 同、礼拝室内のミフラーブ

深見 奈緒子

早稲田大学イスラーム地域研究機構招聘研究員
日本学術振興会カイロ研究連絡センター長

序

ミフラーブとは、モスク等の宗教施設においてメッカのカーバ神殿の方角を指し示す壁龕のことで、イスラーム教徒はミフラーブのある壁に向かって礼拝する。そこに神聖性こそ宿りはしないが仏教寺院の厨子、あるいは神社のご神体、教会堂の祭壇のようなもので、モスク建築のシンボルともいえる装置である。イスラームの長い歴史において、息をのむような、精緻な作品が数多く造営された。なかでも、ランプを好んで描いた一群に注目したい。

本稿では、モスク建築に必要不可欠だと思っていたミフラーブのないモスクに出会い頓悟した経緯、ゲジャラト地方から各地に輸出されたランプ文様付きのミフラーブを訪ねた旅、そしてイスラームが南アジアに伝播するにつれランプが変容していく様相を描いてみたい。加えてそのミフラーブが存在する土地の思い出の写真を掲載する。その前に、いくつかの、歴史的に重要な作品を通して、美しいミフラーブを紹介したい。

ミフラーブの名品

ミフラーブの歴史に関しては諸説がある



地図。本稿で言及した都市の所在



7. 同、中央廊からミフラーブを臨む



6. 同、961年建設のミフラーブ



5. コルドバのメスキータ。南東からキブラ壁を撮影。中央に大聖堂の部分がそびえる



4. ラッカダ博物館に展示されたラスター・タイル

訪れると、似たようなタイルが飾られてい

けれど、壁を凹ませた壁龕の形は、七〇五
／六年にメディナの預言者のモスクを改装
した際に登場したと言われる。その頃の作
品として、バグダードの博物館に所蔵され
た大理石のミフラーブが最古の実例とされ
ている。いつかはぜひ実見したい作品だ
が、いまだ叶わない。

チュニジアのカイラワーン大モスク(図
1)には九世紀半ばアグラブ朝時代のミフ
ラーブがある(図2)。当時貴重品だった
輝くラスター・タイルをふんだんに貼り
(図3)、かすかに馬蹄形尖頭アーチの下
に、黒地に金で葡萄唐草を描いた木製半
ドーム、凹部の壁面は精細な大理石彫刻の
パネルで飾る。パネルの石彫は、格間に分
割され、部分的には打ち抜き細工となる。
アーチを支えるのは赤い大理石円柱で、ビ
ザンティン様式の柱頭をいたたく。広大な
まるで円柱の林のような礼拝室の最奥壁に
設えられ、中央の高い廊とミフラーブ前の
ドームによって、ミフラーブの中心性が際
立つ。

ラスター・タイル(図3)は、当時最新
鋭の技法、タイルを還元焼成することで、
油膜のような煌めきをもつ。おそらくイラ
クのサーマツラーかバグダードから運ばれ
たものだろうと言われる。一辺二一センチ
メートルの正方形完形一三九枚、切り取ら
れた部分が一六枚と大量に使われる。輝く
タイルが遥か四〇〇〇キロメートルの道
りを運ばれたのだろうか。

アグラブ朝の宮殿跡のラッカダ博物館を



10. 同、オルジェイトウの礼拝室



9. 同、オルジェイトウのミフラーブ



8. イランのイスファハーンの大モスク、南西から見た全景

た(図4)。輝きは褪せ、彩色部も滲んでいるのを見ると、遠くから来た技法が、次第に現地にも定着していき、カイラワーン周辺でもラスター・タイルが生産されるようになったのかもしれない。

このミフラーブからはほぼ一〇〇年後、コルドバのメスキータ(図5)に、多彩なガラス・モザイクと石彫のミフラーブが増築された(図6)。大聖堂に転用されてからも、大事に守られ、製作当時の美しさを保つ。濃紺の地に金のインスクリプションが、コの字型に馬蹄形アーチを囲む。インスクリプションにはコーランの聖句と建設の経緯が刻まれる。アーチのエクストラドスは放射状に分割され、赤、濃紺、金、茶、黄などのガラスのテッセラでアラベスクが描かれる。下部には、アラベスク浮彫の白大理石パネルが腰壁をかざり、一方上部には、白大理石の石彫の帯が各部を縁取り際立たせる。馬蹄形アーチの奥は、直径約四メートルの八角形の部屋になって上部に貝殻型の天井が架かる。今は、ミフラーブの前に柵が設けられ、七メートルほど離れたところから見ることしかできない。しかしながら、ミフラーブ前の三つの曲面天井、そして幅広の中央廊によって、ミフラーブへの高揚感を実感できる。ハカム二世がミフラーブとともに増築したマクスーラ部分は、この素晴らしいミフラーブを焦点とし、他の部分から抜き出した空間を造る(図7)。

もうひとつ、イランのイスファハーンの金曜モスク(図8)に寄進されたオルジェ

イトウのミフラーブを紹介したい(図9)。先に述べた二つのミフラーブは壁を削り貫いたような形で、多彩で煌めく美しさを誇っていたが、この実例は、前二例と比べると比較的平坦で、乳白色単色のミフラーブである。スタッコの細やかな浮彫で、スルス書体のインスクリプションと唐草文様が絡み合う。円柱、尖頭アーチ、柱頭も全てがスタッコの浮彫で造られる。一三一〇年に建設され、オルジェイトウがシーア派に傾いてからの作品である。外枠部分には二人のイマームの名前が記され、建設の経緯に加え、アリーに関するハディースも刻み込まれる。ミフラーブの建設に加えて、オルジェイトウは金曜モスクの東翼廊部分の柱を取り去り、細長い広間に作り替えた(図10)。

カイラワーン、コルドバ、そしてイスファハーンの三例は、ミフラーブは単に壁に設置されるだけでなく、その存在が大きく建築計画に影響を与えることを物語る。

各地でずいぶんたくさんのモスクを訪れミフラーブやドームを写真に収めてきた。ひとつのモスクにミフラーブをたくさんもつ実例、建物の外側にもミフラーブ部分を現す装飾をもつもの、ミフラーブが礼拝室から入る部屋になっているもの、多様な実例と出会ってきた。先に紹介した最上級の名品はもちろんのこと、この経験からも、世界中の全てのモスクに共通するのは、アーチの形をし、モスク建築の焦点とも言えるミフラーブがあることと、二〇一三年までは思い込んでいた。



13. コタバルのカンボン・ラウト・モスク内のキブラ壁、中央は現代の演壇、右手はミンバル



12. タイ、パタニのクルー・セ・モスク、木造の地域には稀なレンガ造のモスク



11. マレーシア、コタバルのカンボン・ラウト・モスク



16. 同、マーレのイド・モスクの礼拝室、キブラ壁は珊瑚石の白壁



15. 同、イハヴァンドゥーの大モスクの礼拝室、キブラ壁は珊瑚石の白壁



14. モルディブ、マーレの大モスク、基壇を上って礼拝室に入る

ミフラーブのないモスク

二〇一二年にマレーシアのコタバル（図11）、そしてタイのパタニ地方（図12）を訪れた時、木造高床式のモスクで、礼拝室の奥壁が平坦な板壁となっていた（図13）。そこにはアーチ型のミフラーブは見当たらなかった。雨が深い東南アジアではモスクに傾斜屋根を架けるため、モスクの一番奥はかなり天井高が低くなる。北マレーシアと南タイにはそれほどたくさんの実例が残っているわけではなく、コタバルのモスクは移築されたものである。加えて、壁も薄板の木造なので、何らかの理由で平坦な壁に作り替えた特例だろうと勝手に思いこんでしまった。私の頭の中には、ミフラーブはアーチ型という固定観念が深く刻まれていた。

二〇一四年の冬に、モルディブ諸島の古いモスクを調査する機会を得た。モルディブでは、海から切り出した珊瑚石で、高い基壇と壁を造り、木造で小屋組を造るのが伝統的な構法である（図14）。今はトタン葺きになっているけれど、本来は草葺き屋根を架けていた。壁は珊瑚石で積まれ、メッカの方角には真っ白な珊瑚石の壁があるだけというモスク（図15、16）にいくつも出会った。そして、いくつものモスクでミフラーブ・ゲ（ミフラーブ室）と呼ばれる特別な区画の中の壁も白壁であった（図17）。ここで、ミフラーブとはアーチ型の印ではなく、意図的にアーチ型を造らないモスクという存在を考えなければいけないということを知った。

思い起こしてみれば、預言者ムハンマドがメディナに聖遷し、共同体の拠り所として預言者のモスクを建てたとき、メッカの方角は壁に石を置いて示しただけだった。七世紀から八世紀にかけてアラブが拡張していく中で、既存のユダヤ教やキリスト教からの影響、あるいは既存の古代ローマやサーサーン朝ペルシアの建築文化を吸収する中で、アーチ型のミフラーブが造られるようになったのである。

モルディブ諸島の歴史的モスクの実年代は、古いもので一七世紀である。彼らがなぜ、いつからアーチ型のミフラーブではなく、メッカの方角をただの白い壁としたのかは、今となってはわからない。

一方、モルディブには、三棟のアーチ型のミフラーブを持つ歴史的モスクがあった。ひとつはインドのグジャラト産の大理石ミフラーブ（図18）、もうひとつはインドのヴァローダで造られた木製のミフラーブ（図19）、もうひとつはおそらくモルディブ産の赤と黒のラッカー細工の木製ミフラーブ（図20）である。すなわち、彼らはアーチ型のミフラーブの存在は知っていたのである。けれども実際にモスクを建てる場合に、意図的にメッカの方角には何もつけず白い壁とすること、あるいは区画されたミフラーブ室を設けることを選んだのである。

それから、もうひとつ、モルディブには珊瑚石のアーチはないけれど、木の両引き戸の前に放物線アーチ型の枠をつけて、入口として使う（図21）。モスクの入口にも、



20. 同、フェンフシの大モスクのミフラーブ



21. 同、フェンフシの大モスクの東入口、アーチ型の木枠内に引き戸が設けられる



19. 同、マーレの大モスクのミフラーブ、ミフラーブ室の壁に取り付けられる



18. 同、マーレのシディ・モスク、1322年のモスク建設が記載されたミフラーブ



17. 同、イシュドゥーの大モスク、礼拝室奥にミフラーブ室が設けられる



24. 同、マーレのシディ・モスク、グジャラート産のミフラーブのランプ文様



23. 同、マーレのカルヴァカル・モスクの礼拝室内天井部にある鍵文様



22. 同、マーレのイード・モスクの基壇にある鍵文様

このような両引き戸が設けられる。さらに先ほど述べたミフラーブ室の入口にもこの両引き戸とする(図17)。ミフラーブ室の入口が閉まっているとあたかもアーチ型のミフラーブのように見える。ただし、この入口はメッカの方角、すなわちモルディブで西の方に面するわけではない。両引き戸がモチーフとなり、アーチ型に大きな鍵を吊り下げたモチーフとして数多く使われる。珊瑚石の基壇の格間(図22)、天井の木造彫刻(図23)などにみられる。

モルディブの文化には不思議な側面がある。例えば、両引き戸もその一つである。日本では両引き戸は当たり前だけれど、中東や南アジアではほとんど見かけたことはない。このルーツも解明しなければいけない課題である。引き戸に加え、ラッカー細工、アラビア語の特殊な書体(図20)、珊瑚石の彫刻など他の地では見られない特異な技法や様式がある。しかも、小さな島々がネットワークのように連なる環礁が、二〇〇キロ以上にわたって連なるという、非常に疎らなモルディブ諸島のほぼ全域にこれらの特徴が共通している。おそらく、さまざまな土地から流入した文化のなかで、あるものを選択し、極めていき、それが環礁内へ、そして異なる環礁へと広まっていくという過程を通して、特異文化の共通性が造られていったことが推察される。そして、一二世紀以後のイスラーム文化だけではなく、それ以前の仏教、あるいはヒンドゥー教文化にも同様な過程があり、後発のイスラーム文化は既存のモル

ディブ文化の上に成立した。

グジャラート産のミフラーブを訪ねて

モルディブに外界からもたらされたものとして、シディ・ミスキーに一三二二年のモスク建立を記したミフラーブがある(図18)。珊瑚石の小さなモスクの壁に取り付けられているが、モスクの年代はそれほど遡ることはできなくて、おそらく一八世紀の建設であろう。おそらく改築されたときに古いモスクからミフラーブだけを新しいモスクに付け加えたと思われる。

家島彦一先生や、ランブーラン女史がすでに記しているように、一四世紀にグジャラートの港市キャンベイで加工され、広くインド洋一帯にもたらされたミフラーブや墓石の一群がある。インドのラジャスタン産の大理石を加工したもので、ランプ文様がその特色である。シディ・ミスキーのミフラーブはそのひとつである。

細長い長方形のパネルで、上部約三分の一をアーチ部として突出させる(図18)。オジー・アーチの内側に多弁形アーチから鎖で吊るされたランプ、その両側に宝珠を載せた灯籠、さらに半分の樹木から吊り下る木の実が、アーチの上には対の払子が削られる(図24)。太いインスクリプション・バンドが下三分の二との区切りとなる。下の部分は両脇に文様帯、中央部分は七段のインスクリプションとなり、一三二二年にスルターン・ジャラールによってモスクが建設されたことを綴る。

キャンベイから運ばれたと言われるラン



28. 同、キルワの大モスクのミフラーブ



27. 同、ザンジバルのキジムカジ・モスクのミフラーブ



26. タンザニアのダルエスサラームの博物館に展示されたキルワ出土の墓石



25. タンザニアのキルワの海岸、ダウで上陸する



32. 同、ラール市内のカージャール朝期の中庭住宅、現在も使用されている



31. イラン、ラールの大モスク、現代建築に置き換わっていた



30. 同博物館の中庭



29. イランのシーラーズの碑文博物館に展示されたラールのミフラーブ

ブ文様付きの大理石のミフラーブや墓石について家島先生は一〇カ所を、ランブーラ女史は二八カ所を指摘している。可能ならばすべてを実際に訪れ、実見したいのだが、現在のところ、グジャラート地方以外で四カ所を訪れた。実見した例を中心に、それぞれを比較してみたい。

東アフリカ、イランそしてマラバールの順に訪ねた。タンザニアの沿岸部、キルワ(図25)の墓地から発掘されたと言う墓石が、ダルエスサラームの博物館に展示されていた(図26)。幅五〇センチメートルほどの大理石で、途中で切断されており、本来は箱形の側面を構成していたと思われる。上下のインスクリプション帯に挟まれた部分に、左端に樹木を配し、多弁形アーチが連なる形である。モルディブのランプ文様と比較すると、両端の宝珠を載せた灯籠、立ち上がる多弁形アーチ、アーチ頂部から吊り下るランプという構成は似ているが細部は異なる。また文字の書体もキルワのほうがより複雑である。

ちなみに、スワヒリ地方には壁を囲ませたミフラーブが多い。珊瑚石の一〇七年建立のキジムカジのミフラーブ(図27)は、どちらかと言うと先述したコルドバのメスキータのミフラーブ(図6)と近い。切り込みの深い多弁形アーチや、振り柱など西アジアの形態が取り入れられた。なお、先の墓石が発掘されたキルワの大モスクのミフラーブは、より装飾的にシンプルながら、同じく壁を囲ませたミフラーブだ(図28)。ソマリヤのモガデイシオのファクル・

アッディン・モスクは、グジャラートから輸入されたランプ付きの大理石ミフラーブの上に、イランから輸入されたラスタール彩のタイルのミフラーブを重ねるという特異な例である。スワヒリ地方では普通は壁の凹部としてのミフラーブを採用していたが、この例は、遠くから運ばれた物を珍重して取り付けたという実例といえ、ぜひ実見したい。

また、ラールのミフラーブは、いくつかの書物に記されている(図29)。しかしながら、このミフラーブは、今はラールになく、シーラーズの博物館に移されている(図30)。ただし、シーラーズを訪れると、いくつかの写真とは異なる姿となっていた。両側に出隅入隅で七つに分節された角柱をたて、その頂部に柱頭を載せる。その内部を二重のインスクリプション・バンドがコの字型に囲い、その内側に多弁形のアーチの頂部から鎖で吊り下げられたランプが彫刻されていた。

家島先生の著書等には、この上に載っていた部分の写真が掲載されている。私がシーラーズで見た部分は、この下の部分である。本来ミフラーブは五つの部分から構成されていた。私が見た部分は、柱頭の下ラインで二つに分けられ、さらにその上に中央の多弁形アーチの部分と、両側の矩形に宝珠を載せた部分が載っていた。失われた部分の構成は、中央の多弁形アーチはインスクリプション・バンドとなり、その内部に、モルディブのモスクで見たモチーフ(図24)が挿入される。すなわち、両側



35. 同、コッラムの港を灯台から眺める



34. 同大モスク内に保存されたグジャラート産の墓石



33. インド、コッラムの大モスク、建物は新しい



38. 同、カーゼルーニーの娘の墓石



37. インド、キャンベイの大モスクに付設されたウマル・アル・カーゼルーニーの墓石



36. 同、コッラム郊外の伝統的モスク、木造で傾斜屋根を架ける

ランプ文様の変容

上述のようなランプ文様のミフラーブや墓石が生産された地は、イブン・バットウータも訪れた一四世紀から一五世紀の

の宝珠を載せた灯籠、そこに架かる多弁アーチ、頂部から鎖で吊るされたランプ、灯籠の両側に半割の実のなる樹木である。両端の部分は、下部にアーチ型の中に小さなランプのモチーフを入れたものであった。つまり、このミフラーブには計四つのランプが彫刻されていた。ランブーラン女史の写真では、この両端の矩形に宝珠を載せた部分がすでに欠けている。欠けている部分とよく似た墓石がキャンベイにあり、後述する(図40)。

ちなみにその後、ラールを訪ねると、本来ミフラーブがあった古いモスクはなく、新しいモスクが建っていた(図31)。ラールはペルシア湾から直線距離で一〇〇キロメートルほど内陸に入った町で、古くからの通商路上に位置する。バーザールやハンマムなどの修理も進み、カーズヤル朝期の住宅も残り(図32)、新しい博物館も建っていた。

マラバル半島のコッラムの金曜モスクでは、建物は新しくなっていたが(図33)、ランプ文様付きの墓石は庭に飾られていた(図34)。構成はキルワの墓石と同じだが、ランプの形等は、ラールのミフラーブに近い。コッラムは古くからのインド洋交易の港として有名で(図35)、今でも郊外に木造モスクが残っていた(図36)。

キャンベイであったとされる。その理由は、キャンベイの大モスクにある一三三三年に没したウマル・アル・カーゼルーニーの墓石とその様式が同じであるためである(図37、38)。確かに今まで記した構成と同じだが、より彫りが深く丁寧な細工である。もうひとつ、キャンベイのビッリー・モスクに一三二六年の日付を記載したランプ文様のミフラーブがあり(図39)、これもその理由のひとつである。

生産地であったキャンベイには、先述したラールのミフラーブの欠けた部分とよく似た構成の墓石もある。ただし、墓石なので、平面的である。普通、ミフラーブはより立体的で(図29)、墓石は平面的、あるいは箱形部分(図26、34)となる。

ただし、モルディブのミフラーブ(図18)は、あたかも墓石のような形態をしている。生産地キャンベイでミフラーブと墓石がどのように分けて生産され、碑文がいつどこで彫刻されたのかという点は今後の課題である。

グジャラート地方で、こうしたランプ文様はどのように形成されたのだろうか。インド洋の各地のミフラーブや墓石に注目すると、モチーフの描き方等にはばらつきはあるものの、中央に下がるランプの形は、西アジアにたくさんある、ランプ文様のミフラーブとはほぼ同じ形をしている。プルサのイエシル・トゥルベのミフラーブはその一例で、逆三角形の口部分、丸い胴部分、そして三角形の底部分という構成である(図41)。このランプの形は、マムルーク朝カ

キャンベイであったとされる。その理由は、キャンベイの大モスクにある一三三三年に没したウマル・アル・カーゼルーニーの墓石とその様式が同じであるためである(図37、38)。確かに今まで記した構成と同じだが、より彫りが深く丁寧な細工である。もうひとつ、キャンベイのビッリー・モスクに一三二六年の日付を記載したランプ文様のミフラーブがあり(図39)、これもその理由のひとつである。

生産地であったキャンベイには、先述したラールのミフラーブの欠けた部分とよく似た構成の墓石もある。ただし、墓石なので、平面的である。普通、ミフラーブはより立体的で(図29)、墓石は平面的、あるいは箱形部分(図26、34)となる。

ただし、モルディブのミフラーブ(図18)は、あたかも墓石のような形態をしている。生産地キャンベイでミフラーブと墓石がどのように分けて生産され、碑文がいつどこで彫刻されたのかという点は今後の課題である。

グジャラート地方で、こうしたランプ文様はどのように形成されたのだろうか。インド洋の各地のミフラーブや墓石に注目すると、モチーフの描き方等にはばらつきはあるものの、中央に下がるランプの形は、西アジアにたくさんある、ランプ文様のミフラーブとはほぼ同じ形をしている。プルサのイエシル・トゥルベのミフラーブはその一例で、逆三角形の口部分、丸い胴部分、そして三角形の底部分という構成である(図41)。このランプの形は、マムルーク朝カ



42. エジプト、カイロのスルタン・ザーヒル・バルクーク・ハンカーン（1384-86年建立）の礼拝室、ガラス・ランプが吊るされている



41. トルコ、ブルサのイェシル・トゥルベのミフラーブ



40. 同、キャンベイの大モスク前の広場にある墓石



39. 同、キャンベイのピッリー・モスクにあるミフラーブ



44. 同、ソムナート・パタンの博物館より、大モスクが博物館に改装されている



43. インド、ソムナート・パタンの市門

イロのガラス・ランプでも有名で、今では電球が入っているけれど同じような形のランプが使われる（図42）。

コーランにある光の章は、「アッラーは天と地の光。この光をものか譬えて説こうなら、まず御堂の壁がんに置いた燈明か。」と説く。光り輝くランプが神の表象となり、ランプ文様としてミフラーブ、あるいは墓石に採用された。そして、グジャラートにもランプ文様がもたらされた。その時期は、上述の実例からすると、おそらく一三二〇年代ころであったことが推察される。モルディブの一三二二年のランプ（図24）の形態が他（図29、37、40）と異なるのは、以下に述べる前段階があったからのように思われる。

ソムナート・パタンにある一二世紀創建と言われる門につけられたアーチがそのひとつである（図43）。二本の柱の中央にアーチを挿入し、アーチの中心の花形文様から何らかの容器が鎖で吊り下げられている。容器の形は、インド洋に流通したランプの形とは異なる。また、上部にはうねるような多弁形アーチ（トローラナ・アーチとも呼ぶ）が配され、その中央に容器、そして両脇に二本ずつの灯籠が彫刻される。トローラナ・アーチの同様な構成はヒンドゥー寺院の装飾でも用いられていた（図44）。もうひとつ、矮小化された吊り下げ文様がある。一三〇二年建設のバローチの金曜モスクのミフラーブ上部（図45）、あるいは一三二五年建設のキャンベイの金曜モスクの北入口（図46）にもあり、容器の

形態はどっぴりとしていてランプの形ではない。

これらに描かれた容器をランプと断定するのは難しい。また、いままで紹介したランプ文様の容器の形態とは明らかに異なっている。アーチの中に吊り下げ文様を描くという伝統が、一二世紀にはすでに存在し、一四世紀にはそのモチーフが矮小化して用いられるようになっていた。モルディブの例（図24）は、この形と近いのではないだろうか。

もうひとつ、グジャラートでは、キャンベイがデリー政権に征服された後の一四世紀と、アンヒルワダー・パタンつづいてアハメダーバードを首都とした地方政権が樹立した一五世紀以後では、ランプ文様の形態が大きく異なる点に留意せねばならない。その過渡的存在と言えるのが、カティアワール半島のマンゲロールにあるラヴァアリ・モスクで、一三七〇年の建設である。ミフラーブには、先のソムナート・パタンの西門と同様に、花形文様から吊り下がるランプ文様と異なる容器と、両側に羽のようなものが彫刻される（図47）。東門の中央には、矮小化されてはいるが、同様にアーチの中に花形文様から吊り下がるランプ文様と異なる容器が彫刻される（図48）。その後、アハメダーバードに数多く造られたモスクでは、ランプ文様の容器はほとんどなく、この蓋付きの容器に収斂し（図49）、次第にこの特徴的な容器の周囲に雲のようなものが必ずと言ってよいほど彫刻されるようになる（図50、51）。



47. 同、マンガロールのラヴアリ・モスクのミフラーブ内の文様



46. 同、キャンベイの大モスクの北門の脇柱に見られる吊り下り文様



45. 同、パローチの大モスクのミフラーブ上部に見られる吊り下り文様



51. 同市、ラーニー・カ・フジュラ(1440年頃建立)の墓石にある文様



50. 同市、ラーニー・シバリー・モスク(1514年建立)のミナレット基部にある文様



49. 同、アハメダーバードの大モスク(1423年建立)のミナレット基部ある文様



48. 同モスクの東門にあるミフラーブ内の文様

おそらく、キャンベイにはデリー政権が到来する以前から石工たちが石製品を制作しており、そこには、ヒンドゥー教の吊り下がる容器のモチーフや、灯籠のモチーフが存在した。一四世紀には何らかのきっかけで、特にミフラーブや墓石などのイスラーム教に関わるものに、西アジア伝来の形のランプ文様を刻み込むようになった。もしかしたら、キャンベイにいたイランのカーゼルン地方出身のカーゼルニーがその鍵となったのかもしれない。このランプ文様が人気となり、石製品に刻まれ、インド洋各地に流通していった。一方、土着の吊り下る容器のモチーフも併存し、一五世紀になるとアハメダーバードを中心に流行し雲形をえがくようになり、いままでのランプ文様の方はアハメダーバードでは用いられなくなる。雲のような漂うものを描いたのは、この吊り下る容器が香炉であり、香炉としての存在を強調するためではなかったのだろうか。すなわち、もしかしたら、一二世紀以来の土着の容器はランプではなく、香炉だったのではと考える。

そもそも一つ、先に述べたモルディブのモスクの両引き戸にアーチ型にさらに大きな鍵を吊り下げたモチーフも、同様にランプ文様のミフラーブから生じた異なる形だと考える。ランプは光を、香炉は芳しさを、鍵は貴重なものと関連する。光、芳しさ、貴重なものはみな、イスラーム教にとって重要な要素で、コーランやハディースにランプ、香、鍵の記述がある。

おわりに

固定観念によって、見過ごしてしまう側面に気付いたことで、真摯な態度でものを受け止めなければいけないことを再認識した。環礁モルディブという遠い疎な地域で、文化が特異な方向に熟成された点は、文化自体に加え、土地のもつ力を合わせて考えねばならない点を覚醒する。イスラーム教が伝播し土着化していく中で、ランプ文様が好まれインド洋一帯に運ばれた側面と、ランプが香炉に、そして扉と鍵に変容していく側面を確認できた。

すなわち、動いていくものは、ある種の象徴性によって受容される一方、その土地に根ざしたものと融合し、本来の姿から変容を遂げるということを語っているように思う。広大な地域へと広まったイスラームをたどってみることで、イスラームという宗教による普遍性と、各地域のもつ固有性とが共存していることに気付かされる。